



図3 城下町地区と七曲り地区の位置関係と年代

【七曲り地区の評価と考察】

七曲り地区については江戸時代後期に描かれた佐和山城の古絵図には詳しく描かれておらず、どのような土地利用がなされていたのか長らく不明でした。しかし、昨年度と今年度の調査により、七曲り地区には15世紀後半(1450～1500年)の屋敷地が展開していたことが明らかとなりました。また、屋敷地の周囲には防御を目的とした堀がめぐらされていたことがわかりました。

七曲り地区では昨年度まで調査を行った城下町地区で多く出土した16世紀末～17世紀初頭(1580年ごろ～1600年ごろ:安土・桃山時代)の遺物は見つかっておらず、城下町が成立したころには、既に集落あるいは屋敷地としては使われなくなり、耕作地として利用されていたと考えられます。反対に城下町地区では16世紀末を遡る時期の遺物はほとんど出土しておらず、七曲り地区が居住の場として使われていた時代には人々はまだ集住していなかったということがわかります(図3)。七曲り地区が居住の場として使われなくなった詳しい時期、そしてその背景には何があったのかが、今後の検討課題となります。

まとめ

- ①七曲り地区で堀・区画溝・方形土坑など、屋敷地に関連する遺構が見つかりました。
- ②今回見つかった堀は規模や形状、堆積状況から考えて防御を目的としたものと考えられます。
- ③堀などの各遺構からは土器・陶磁器、漆器、銭貨、碁石など多種多様な遺物が出土しました。
- ④見つかった遺構・遺物は15世紀後半(1450～1500年、室町時代後期)ごろに位置づけられます。これは城下町の機能時期よりも100年ほど古い時代のもので、佐和山周辺の土地利用の変遷を考える上で重要な成果といえます。

佐和山城跡の発掘調査は次年度も引き続き実施する予定です。今後も機会をみて皆様に調査成果をお知らせしていきたいと考えております。今後ともご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

佐和山城跡発掘調査成果説明資料

令和4年(2022年)2月 / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要 佐和山城跡は彦根市北端に位置し、南北約4kmにわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側では江戸時代の朝鮮人街道(下街道)と江戸時代の中山道(東山道)の分岐点があり、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた水陸交通の要衝でした。約1.5km南西には特別史跡彦根城跡が位置しています。石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の六角氏との境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく替わりますが、石田三成が城主の際には城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604年)彦根城の築城に伴って廃城となりました。

調査の概要 佐和山城跡では、これまで彦根市教育委員会、滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会によって、城跡の各所において数度にわたる発掘調査が行われています。当協会では、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課および国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所からの依頼により、一般国道8号バイパス建設工事に先立って平成30年度から発掘調査を実施しています。今年度は主に「七曲り」と呼ばれる谷部で調査を行いました。調査の結果、七曲り地区では堀、区画溝などが見つかり、それらに伴って土器・陶磁器・漆器・銭貨・碁石など様々な遺物が出土しました。見つかった遺構・遺物の時期は15世紀後半(1450～1500年)ごろに位置づけられます。これは石田三成らが活躍した時代よりも100年ほど古い時代にあたります。

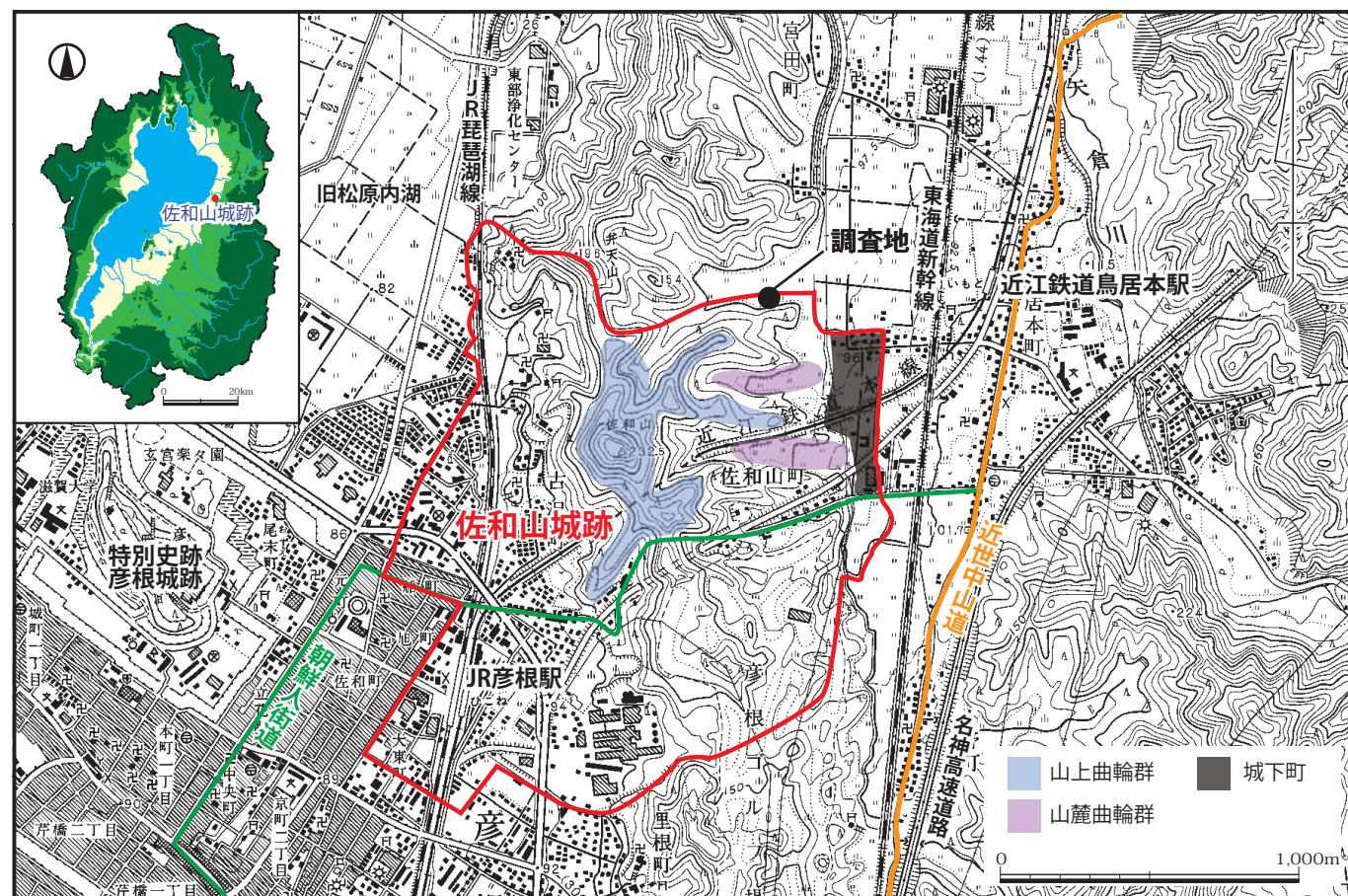


図1 佐和山城跡の範囲(赤枠)と今回の調査地点の位置(黒塗)

検出遺構・出土遺物

七曲り地区では城下町地区よりも古い時期の遺構・遺物が見つかりました。発見された遺構は出土した遺物の年代からおおよそ15世紀後半(1450～1500年:室町時代後期)を中心とした時期に位置づけられます。

【見つかった遺構について】

区画溝 屋敷地を区画する、あるいは同じ屋敷地内を細分すると考えられる溝を合計6条検出しています。幅は約0.4m、深さは約0.2mの規模を測ります。いずれも正方位を採り、現在の水田の区画と合致していました。

堀1 幅約4m、深さ約1.2mの規模を測り、長さ約15mにわたって見つかりました(写真1)。正南北の方位を採ります。前述した区画溝の規模を大きく上回ることから、違った機能・目的があったようです。断面が逆台形(写真3)となっていること、さらに水が流れた痕跡がほとんど確認できないことも併せて考えると、用水路等ではなく、屋敷地の防御のために設けられた「堀」であったと推定されます。最終的には埋め立てられた痕跡を確認できました。



写真1 堀1の完掘状況(南から)

写真2 II区の全景(西から)

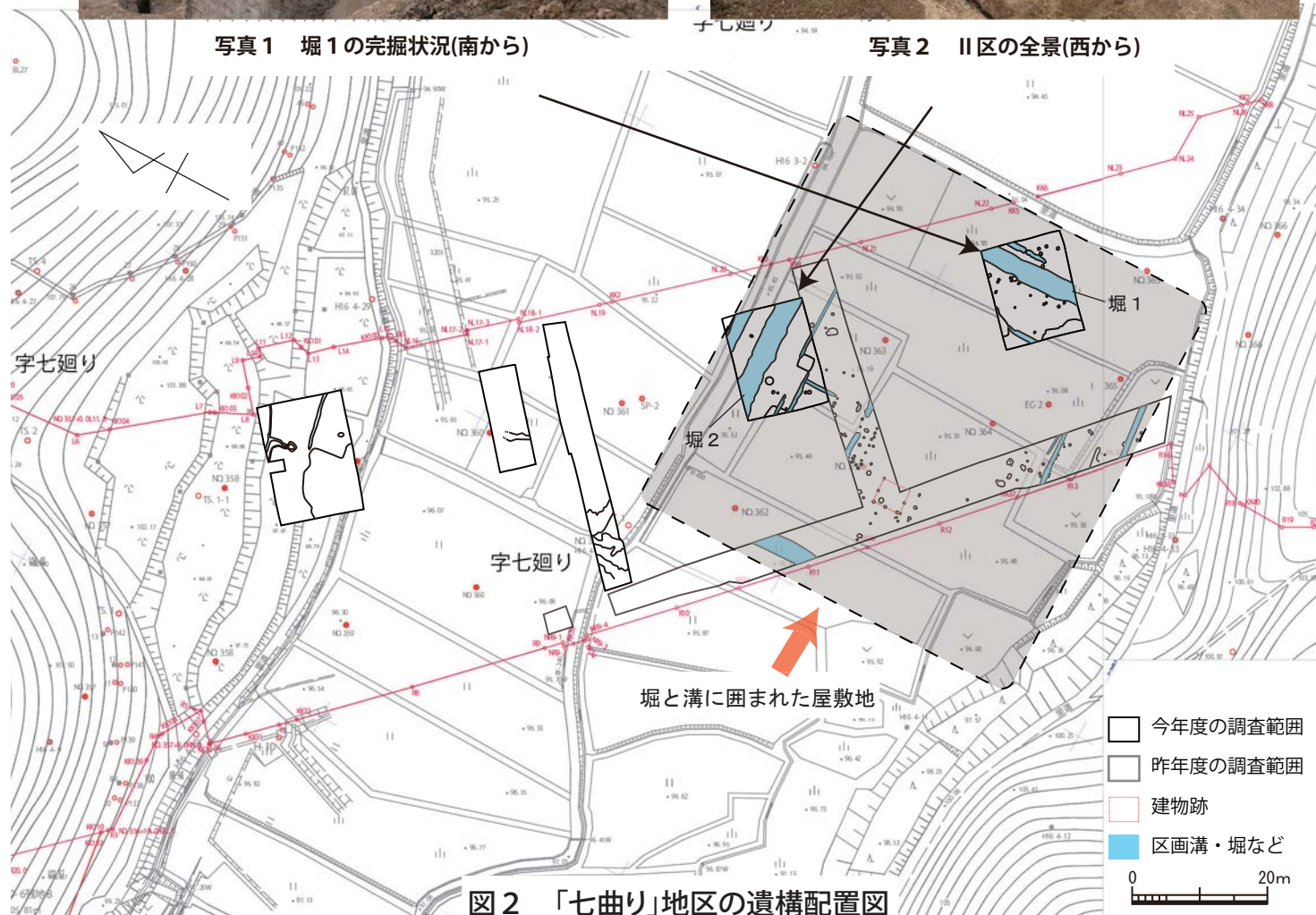


図2 「七曲り」地区の遺構配置図

堀2 幅約3m、深さ約0.7mの規模を測ります。長さ16mにわたって検出しました(写真2)。堀1と直交しています。堀1と同様、規模・形状・堆積状況からみて、防御のために設けられた「堀」であったと考えられます。こちらの堀も埋め立てられた痕跡を確認できました。

その他 以上の遺構のほか、一辺約2mの方形土坑(どうく:人為的に掘りくぼめた穴で性格を特定しがたいものを指す)や柱穴が見つかりました。柱穴には柱材が残っているもの(写真4)も見受けられましたが、セットになる柱穴は見つからず、建物を復元するには至っていません。

【出土した遺物について】

土器・陶磁器 おもに堀1・堀2から出土しました。土師器(はじき)の皿や常滑焼(とこなめやき)の甕、信楽焼の甕・すり鉢、瀬戸焼の御皿(おろしざら)、瓦質土器(がしつどき)の香炉など多種多様な製品がみられます。少量ではありますが中国産の磁器も出土しました。中国産の磁器には割れ面に接着剤として漆が塗られており、割れてしまった後も繰り返し使用していたことがうかがえます(写真6)。これらはおおよそ15世紀後半(1450～1500年)に位置づけられ、城下町地区で見つかった遺物よりも100年近く古い時代のものとなります。

石製品 砥石(といし)が多く出土しました。そのほか少量ではありますが基石(ごいし)も出土しています(写真7)。

銭貨 元祐通寶(げんゆうつうほう:中国の北宋時代の銭貨)が出土しました(写真7)。

木製品 堀から出土した漆器類(写真5)が大半を占めています。このほか用途不明の木製品も多く出土しました。



写真3 堀1の堆積状況(南から)



写真4 柱材が残存していた柱穴(南から)



写真5 堀2から出土した漆器碗(北から)



写真6 出土した土器・陶磁器類



写真7 出土した銭貨・基石